

ふちゅう東西南北 隣接市の“学びのスポット”巡り ～稲城市編～

府中から川向うを眺めると、多摩丘陵が広がる。平坦に見える山並みの中に、どんな学びのスポットがあるのだろう。市境を超えての散策取材。今回は南のお隣・稲城市を巡ってみた。



★巡ったスポット★

京王線稲城駅

常楽寺

妙見寺

— バスで移動 —

城山公園

大麻止乃豆乃天神社

大丸用水

南多摩駅

《稲城市散策》 緑樹と薫風の中で、今日は京王線稲城駅より常楽寺-妙見寺-城山公園-大麻止乃豆乃天神社-大丸用水をまわり、南多摩駅を終点とした取材散策です。

お昼12時に集合した仲間達と共に、それぞれの好みのお弁当を抱え、訪問先のお寺にお庭拝借の許可を頂き昼食です。季節を謳歌し咲き誇る色とりどりのツツジの花、日に日に成長した小鳥の音が時折り空に響き、一同笑顔を交えます。

さあ、出発。稲城市は地区により平均斜度が2.7%～6.5%の高低差がありますが、脚は無理なくリズムに乗って進みます。平安時代末期に建立された常楽寺、そして8月に「蛇より祭」の催しが行われるという妙見寺、神仏習合の珍しいお寺です。バスに乗って次は城山公園。ここは都会の騒めきなど知らぬ気に、濃緑と若葉が深まる山肌もあり静謐さを保っています。大自然の中で、黄花カタクリがうつむき加減に一握りの花を咲かせていました。可憐で直向きに生きる草花に別れを告げて、ゴールへと向かいます。(柴田洋子)

《静寂の寺・常楽寺》 隣接市の取材で稲城市を散策した。最初に稲城を知った昭和の40年代の半ばは南多摩郡稲城町だったが、50年余り経た今日、町は稲城市となり商業施設や住宅環境も著しく変化している。

今回、最初に訪れたのが、印象深い天台宗の寺の「常楽寺」である。稲城市の市街地、京王稲城駅からほど近くでこんな所があったのかと思わせる程の静寂と落ち着きをもつ寺である。比叡山で修行した僧侶が再興したと言われ、都指定文化財の阿弥陀三尊像は市内で最古の仏像である。



その他境内の至る所に立像、坐像がある。ご好意で本堂を開けて貰い観音菩薩、阿弥陀如来、延命地蔵、閻魔坐像等を拝ませて貰った。外に出て金色の千手観音をしばし眺める。

夏には大賀ハスの鑑賞も楽しめるそうで、今回とは違う風景を眺めてみたい。(渡邊繁雄)

《妙見寺》 京王線稲城駅から散策が始まった。稲城市は、府中市と隣接し色々に関わりがあるのに多摩川の対岸ゆえ歩くことがなかったので、新鮮な気持ちがある。

妙見寺は今回訪れた2箇所目のお寺。同じ名の神社と寺院が隣同士にある。寺の山門の左手前に鳥居があり、まっすぐに伸びた階段を登るとその先にも階段が続く。そこをさらに登るとやっと「妙見尊」の社が現れた。妙見寺の方に伺うと昔はこういう形はどこにでも見られたという。ご住職が神社の神職も兼ねておられるとの事。ひっそりとした境内は小山の上であり階段が長く感じられた。静かに建つお社は江戸時代のもので説明がありどっしりと鎮座している。夏には萱で作った100メートル位の大蛇を使ったお祭りが開かれるという。鳥居の前に柱がありカヤの長い綱が渡されていた。これが祭りに使われたものだろうか。本殿の前に立つと賑やかなお祭りの光景が見えるような気がした。(辻 麻美)



《パワースポット・常楽寺》 常楽寺は、この地に建てられて既に400年以上経っていて、仏像、絵、書物、石碑、歌碑、供養塔、珍しい御衣黄、樹木等が境内のあちこちにある。400年も経っているところも沢山あるものなんだね～と思いながら見て廻った。

見ているうちに、作られた時の意図とは違ってしまった物や解釈が変わってしまった事も有るのではと思い、気になった物は帰宅後調べてみた。最澄の言葉と言われている「一隅の光」も「国の為になる」が抜け、ただの道徳的な教えとなっている。

境内を一つ一つ見ていきながらふと思った。一番変わったのは人々の心かも。それでも変わらないのは家族を想い弔う気持ちなのではないだろうか。時を経れば新しい形にはなるのだろうけど…

400年の間に、世界大戦、大震災等に会いながらも残ってきた物には、それなりの意味とエネルギーがあり、先人達の生命力が満ち満ちているようだ。私には、先人達の息遣いが感じられ、彼等のエネルギーが有るように思う。今の不安な世の中を生きていく力を貰った気がした。みなさんも行って触れて力を貰って下さい。お勧めです。(山田詩子)

《六地蔵に想う》 最初に訪れた常楽寺にも、最後に訪ねた円照寺にも六地蔵があった、本当によく見かけるお地蔵さまたちだ。きっと3でもなく5でもなく6というところに仏教的な深い意味があるのだろう。

この“6”は、仏教における輪廻転生という死生観を表しているとのこと。人間は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の6つの世界を輪廻しているのだそう。これを六道輪廻という。

ぐるぐる回ってはいつまでも抜け出せないではないか。そのうち目が回ってどうでもよくなってしまおう。そこで初めてすべてを超越した涅槃に至るのかな。

苦しむ人に慈悲の心で救いをもたらすのがお地蔵様の仕事だそう。苦しむ人、悲しむ人は無限に存在する。お地蔵様の仕事も無限だなあ。(中井博子)

《大麻止乃豆乃天神社 (おおまとのつてんじんしゃ)》

行程の後半、城山公園の向かいの小高い天神山に天神社とお寺があるというので立ち寄ってみた

まず驚いたのは、大麻止乃豆乃天神社という白いのぼり旗が参道石段の左右に沢山はためいていること。地域の人々が奉納したもので、今も神様がいかに崇敬を集めているかがよくわかる。神社の名に大変興味を惹かれたのでべてみた。平安時代の延喜にも載る古社で、祭神は櫛真知命 (くしまちのみこと) といい、太古の太占 (ふとまに/占い) を司る神とされる。自然現象を司る天津神 (あまつかみ) である。



参道入り口には神社の別当寺、臨済宗の大悲山園照寺があり、墓苑を含む広い敷地を占めていた。典型的な江戸時代の神仏習合の世界が広がり、永い日本の里の文化を思い起させる。息せき切って階段を登りきると、古い社があり、その周辺には津島神社、秋葉神社や稲荷神社の小さな祠があった。社は鬱蒼とした新緑の樹々で囲われ、周囲の太い孟宗竹の林が印象的だ。

地域の豊穡と安全をもたらす天津神への信仰はいつまでも続くのだろうと思いつつ、眼下に多摩川の流れと府中の街を眺めながら石段をおりた。(奥野英城)

《城山公園のカタクリ》 稲城市立中央図書館の裏手の坂道を上っていくと、左右に樹木が生い茂り静寂な風が流れている広場に出る。大通りからほんの数歩を入った地点とは思えない静かさと、付近にあふれる香りと涼しさが心地良い。広場の左手には頂上に向かう細い山道があり、山道に沿う斜面にカタクリの群生地がある。カタクリは早春の山を彩る赤紫の可憐な花がひっそりと咲いているイメージで、花言葉は「初恋」

「寂しさに耐える」だ。下向きに咲くその姿は、初恋の少女が恥じらいで気持ちを素直に言い出せないような切ない姿を思わせる。ここには珍しい黄色の花も咲いている。



カタクリの花は種をまいてから開花するまでに7年以上もかかるというのに、花の期間はおよそ数日という儂い花だ。非常に敏感な植物で、自然環境が変わると姿を消してしまうこともあるという。

この花は地元の方が植えて大事に栽培しているらしいのだが、知る人ぞ知る隠れた名所である。
(小林清次郎)

《取材を終えて》

今回の稲城市散策取材は、市の南にある京王稲城駅から北へと向かうルートにしました。稲城は案外と坂の多い街で、南から北に向かうルートの方が、比較的下り坂が多いからです。

南 (妙見寺) から北 (城山公園) へは、今回はバス移動としました、暑い日だったので。歩くと30分くらいの道のりです。

いずれも一見の価値ありのスポットですので、是非訪れてみてください。

隣市を訪ねるシリーズも3回目ですが、行ってみると様々な発見があり、「近くにあるのに知らなかった」「なかなか面白いね」という感想をいつも持ちます。

みなさまも、新しい学びを求めて、ちょっと発見の旅にお出かけください。

